

# ブラジルの道路交通事情 その2

北海道大学大学院教授

加賀屋 誠一

## 環境都市の交通政策

ブラジルの環境問題への関心は、日々高まりつつある。特に交通環境についての関心は高く2002年3月19日から3日間、ベレン（アマゾン川河口の都市）においてJICAとブラジリア大学主催のシンポジウムが開催された。ここでは、アマゾン開発と環境からみた交通の意味を議論する場が設定された。アマゾンの環境に対する地域開発のインパクト評価、交通システム基盤の改善と無計画開発が環境に与えるインパクトの共通領域を議論するのが主目的であった。このように、ブラジルはアマゾンをはじめとする世界に類をみない自然環境と、農業

や観光を中心とした産業開発による経済の押し上げといった問題の中で大きなゆらぎを見せている。1992年リオの環境サミットでは、サステイナブルな開発、すなわち持続的開発とそれを実行するためのアジェンダ21が採択され、現在でも、環境におけるグローバルな目的となっている。

ブラジルで最もサステイナブルな都市というと、クリチバをあげる人が多い。クリチバはリオ環境サミットに引き続き開催された「世界都市フォーラム」を開催し、環境都市としての名を世界に発信した所としても有名である。ブラジルは、人口百万人以上の都市、いわゆる百万都市といわれる都市は、数多く存在するが、クリチバもブラジル南部に位置する百万都市（1998年155万人）である。といってもクリチバは、サンパウロ、サルバドル等のように、古い町ではなく、ここ30年で急激に発展した都市である。当時市長を務めたジャイメ・レイネルという人が、環境重視の都市計画を最初に取り上げたのである。その後のことを話す前に、ブラジルの日系人の活躍については、紹介するまでもなくすばらしいの一言である。従来これといった農業技術を持たなかった地域において、米をはじめ果樹等ありとあらゆる農業を花開かせたのは彼らであるといってもいいほどである。しかしながら、3世、4世を含めても僅か120万人といわれ、総人口の1%にも満たない。現在百万都市では唯一、日系人の市長タニグチ氏が在職しているのがここクリチバである。クリチバの都市経営では、付属の都市研究所が果たす役割が大きい。ここでは、サステイナブルな都市づくりの計画から経営まで総合的な研究を行っている。いわば、市長のノウハウをまちづくりの実践に生かすための研究機関でもある。レイネル前市長が様々な環境まちづくり施策を打ち出したのは、タニグチ氏によるところが大きかったと言われる。したがって、レイネル前市長が、後継者としてタニグチ市長を指名したときは誰も異存がなかったのである。

クリチバの環境行政で目を見張るのは、まず第1に、公園の建設である。公園の広さは、世界の有数な都市の中では、オスロに次いで2番目といわれている（写真-13）。





写真-13 クリチバにおける代表的公園

次に公共交通の整備、特にバス交通を徹底的に整備したことである。これは、一般的にゾーンバスシステムといわれるがバス停のユニークなデザインと共に、極めて独自の考え方を持っている。すなわち、バスの種類を高速から低速まで3段階に分け、それぞれの速度の区分と走行ルート区分を対応させる政策である。広域的なバスネットワークは、バス専用道を計画し、高速で走ること、また、住宅地と都心を結ぶバスネットワークは、準高速とし、3連バスによる高速かつ大量に輸送するシステムとなっている。都市内は、低速できめ細かな対応ができるシステムになっている。このようなメリハリをバスの輸送機能ごとに付けた点が最大の特徴である。しかもゾーン均一料金という形態をとっており、どこまで行っても乗り継ぎしている限り、1レアル（約60円）の料金を設定している。乗り換えも、ユニークなバス停（ホーム式）によってスムーズにできる。また、郊外型のバスか、都心型のバスかは色によってすぐに判別できる。このようにして、初めての人でも楽にバスを利用できるシステムは、日本でも考えていかなければならないシステムであると考えられる（写真-14）。

第3の特徴は、ヨーロッパの都市によく見られるような都心部においては、歩行者専用空間を多く取り入れていることである。これによって、都心部



写真-14 ユニークなバスシステム-三連バスとバス停、バスレーン

は車の騒音もなく、人々はゆっくり街の中を楽しむことができる。このようなまちづくりが、環境都市形成の一役を担っている点は大きいといえる（写真-15）。



写真-15 都心部の歩行者専用空間

最後に、ゴミ回収のアイデアを紹介する。ブラジルの他都市、例えばブラジリアなどは、生ゴミとその他のゴミくらいしか分別は進んでいない。しかし、クリチバでは、リサイクル可能なものは、例えば紙類などは4kgに対して1kgの新鮮野菜と交換できるシステムを採用している。このことによって、周辺農家も助かるし、住民も助かるシステムをまちづくりに導入している。

クリチバの最大の問題は、川の沿岸にスラムが多いことである。スラムのでき方には、おもしろい話がある。まず地方からで稼ぎに来る。そうすると、ブローカーがやってきてスラム地区の家を安く貸すことを持ちかける。安い家賃なので、不法居住地であっても、金を払って住み始める。さらに別のブローカーも登場して居住者全員に声をかけより住み心地のよいスラムを勧誘する。そうして大量の人間が別の場所に移動し、より大きなスラムを作っていく。そこでは、一般的にビニールシートで造る家、合法地区の電柱から地下にトンネルを掘って電気をひく、そのようなシステムが一般的に作り上げられる。その結果、合法地区と遜色ない居住環境が形成されることになる。

このような居住システムは、大都市周辺では一般的にみられ、ブラジリアにおいてもテントを張るケースが至る所にみられる。

## ブラジリア生活雑感

ブラジリアでは、久しぶりアパートの1人住まいを経験した。そこでの経験を2、3披露して結びにしたい。

アパート住まいをして、一番敏感なのは、物価の問題である。食料品は、豊富でしかも安い。肉であるが、ビーフはいろいろな種類がマーケットに並んでおり、その中で最も高く、口に喜ばれるものはフィレ肉である。1kg日本円で約1000円である。他のあらゆる食材も同様に安い。日本の物価と簡単には比較はできないが5分の1から10分の1程度であろうか。したがって、食費は、1週間に1度の日本食レストランでの食事を含めても、せいぜい3万円もあれば十分である。ついでであるが、ビールも非常に安いといえる。350mm缶がマーケットで30円から40円程度で購入できる。ミネラルウォーターもほぼ同じ価格なので、ビール通には応えられない魅力がある。アル中までいかなくても、痛風は多いのではないかと思わざるを得ない。ブラジルでは、ビールはほとんど凍るまで冷やして飲む。ビールの味わい方がこう見てくると随分違ったものになっている。日本では5度前後がいいとされているようだが、英国では、ほとんど冷やして飲まない。ブラジルはその好対照である。

さて肉の話に戻るが、シュハスコはブラジルの有名な焼き肉である。大きな串に、肉のかたまりを刺して、ウェイトナーがテーブルを回り、ナイフで薄く切りながらサービスをする。肉は、牛の各部分ごとに焼かれ、その部分の名前をいいながら持ってくる。どれも同じであるが、後になると人気のある部分の肉例えばフィレとかこぶ肉とかが回る。次から次へと、わんこそばのようにサービスをしてくれるので、最初、たくさん食べると後のおいしい肉を食べられない。したがって、最初はノンを繰り返し控えた方がいい。何回かトライすると、そのような知恵が働くのである。両面を赤と緑色をしたプレートが各自のテーブルにあり、緑は継続して食べる意志があること、赤は逆にギブアップを表す。緑のままでおくと、例え、その肉は断られても、いつまでもサービスをしてくれる。肉の味はといえば、肉に岩塩をまぶしたもので、他に何も味付けをしない。肉



写真-16 シュハスコのサービス

そのものの味である。彼らにいわせると、肉は塩をふって食べるのが一番であるし、ブラジルの肉はごまかしのない食べ方で食べるのがいいということである。そのような理にかなった言い方をされるまでもなく、本当においしい肉を提供してくれる（写真-16）。

このように食べ物の話になるとつきないが、昼食は、多くの人の間で、ポールキーローというレストランに人気がある。これは、1kg いくらという価格で、量り売りする昼食である。野菜も肉も、手の込んだものもそうでないものも、全部単価が等しいとする、いかにもブラジルらしいものの売り方である。このビュッフェスタイルのレストランは自分の好きなものをとれるせいか結構楽しく食べることができる。量も加減できるので、女性の間でも結構人気がある（写真-17）。



写真-17 ブラジルで人気のあるポールキーローの様子

ブラジルの音楽といえば、サンバとボサノバであろう。それらの音楽の神髄を究めたわけではないが、ブラジル人は、世界でも有数の音楽好きの国民といえよう。老若男女を問わず、サンバが流れ出すと、口ずさみまた踊り出す。サンバは、個人的に解釈すると、多民族的な音楽かもしれない。ラテンのリズムがもともとの原型だと思うが、それにポルトガルのファドも加わったような、ある意味でもの悲しいものを与える。比較的シャイな国民ともいえるブラジル人にはサンバは、またとない自己表現できる、あるいは内面的なものを発散できる音楽ではないか。少なくとも、ワールドカップでもブラジルは、大活躍し、優勝の栄冠に輝いたが、サンバのリズムとサッカーの動きが奇妙に調和した独特の快感を与えてくれているのは確かである。

ブラジルは、このように多様な側面を持ちながら成長しつつあり、21世紀において真に注目される国の1つになることは間違いないのではないだろうか。

執筆者の加賀屋教授は、2000年4月から2001年9月までブラジル都市交通人材開発プロジェクトのリーダーとしてブラジルに派遣されました。前号（11号）に続き掲載します。